

夢・転生・フッサール現象学

渡辺恒夫 (Tsuneo Watanabe)
(東邦大学)

§ 1 序論 夢の現象学の方法論

@現象学的心理学：経験的現象学の一部門。フッサール現象学（＝超越論的現象学）を経験的研究に適用可能とするため、心理学者によって発展させられている。

超越論的方法の経験的心理学的方法への置き換え例（渡辺、印刷中。配布資料）ⁱ：

・現象学的反省⇒体験記述事例テキストについての考察。

・エポケー⇒テキストの一人称的読み（体験を記述したテキストはすべて私自身の体験記述として読む）。・本質観取⇒内的体験の構造図解法。

@夢研究へのフッサール現象学的諸原則。

①夢は、現実世界と同等の存在権利を持った「世界」である。②夢を夢以外のもの（脳の状態、無意識的願望など）によって説明も解釈もしない。③夢世界と現実世界を区別する根拠を、内的経験の構造の違いに求める。④デカルトのように「現実には夢ではないのか」と問うだけでなく、「夢も現実ではないのか」と問い、夢世界の中に、現実世界の名に値する世界を探し求める。⇒本研究の目標。

§ 2 「インセプション」—— 「他者の夢への侵入」の現象学的解明

映画「インセプション」の他者の夢に侵入するアイデアは、個々の人間が内部を備えた箱のように「内面」を持った身体とみなされる「箱型人間観」を前提している。故に他者の夢への侵入とは「他の箱の内部」への侵入ということになる。が、他者の身体や脳の内面を調べても「内面」が見つかるはずはない。そのような原理的に観察不可能な世界へ「侵入する」とはいかなることか。考えられるのは、侵入すべき他者（A）と侵入者である私（W）とは同じ夢を見ただけではないかということである。これを同一仮説と名づける。

I 私（W）が侵入する側だとしよう。このとき私は、Aの夢であることを自覚しながら、その夢の中でWとして振舞っていることになる。一方、Aの側から見れば（あるいはAによる記録によれば）、夢であることを自覚しながら、Wという人物として振舞っているという明晰夢を見ていることになる。二つの夢は同一なので、私の側からみると、夢であることを自覚しながら（この自覚の中にはAの夢であると言う自覚が含まれている）、Wという人物として振舞っているという、特殊な種類の明晰夢を見ていることになる。

この夢は誰の夢だろうか。現象学的に還元された夢世界では、この夢の夢主はAである。つまり超越論的自我がAに位置しており、経験的自我がWなのである。目覚めることによって、私は、超越論的自我と経験的自我が再び一致したことに気がつく。つまり、転生が起こったのである。Aに超越論的自我が位置する一つの世界から、Wに位置する別の世界へ転生したと、解することができるのである。

II 私（W）が侵入される方だとしよう。同一仮説の下では、私（W）は、Wの夢の自覚

を伴いつつ、AになってWから見て勝手な振る舞いをしたという明晰夢を見ていることになる。しかし、目覚めても超越論的自我の交替を伴わない以上、転生とはいえない。ここで、目覚めて後、Aが実在すること、しかも、Aの、私の夢の中での振る舞いは、実在のAの意図にもとづくことを知ったとする。このような場合、私はAに憑依された、と言う。

@結論。①私が夢を通して他者Aの夢に侵入するとは、他者Aの夢という自覚を伴った一種の明晰夢を見ることであり、これは、他者Aへと一時的に転生することを意味する。②私が他者Aに夢を通して夢の中に侵入されるとは、他者Aに一時的に憑依されることを意味する。これが、インセプションの現象学的解明である。

§3 なぜか別人として生きている夢

実際の夢事例テキストから、「なぜか別人として生きている夢」を取り上げ、これらが「転生」として理解可能であることを論じる。

【事例1：別人として現実にはないアパートに住んでいた夢】「2011年2月18日。夢を見た。アパートに住んでいた。古ぼけた畳敷きの部屋だった。隣との間は、薄い板壁一枚だけで、仕切られていた。／夢の中ではこのアパートは見慣れた場所だった（目が覚めて思い起こしても、過去の他の夢に何度か出てきたという気がする）。そして、夢の中では、私は別人だった。つまり、渡辺恒夫ではない人物だった。（中略）この辺で目が覚めた。」

夢を、現実世界と存在論的に対等の地位を占める「世界」であるとみなすことと、夢世界の中で私が「渡辺恒夫」以外の人間であったこと。この二つの論理的帰結として、私は、目覚めと共に「他の誰か」から「渡辺恒夫」へと、超越論的自我ごと転生したといえるのではないだろうか。

現実と比べると、「夢の中ではこのアパートは見慣れた場所だった」というだけでは、この夢には歴史的継続性が不足していると言われるかもしれない。そこで、次の例はどうか。

【事例2：夢の中で他の夢を現実のこととして想起する】「新宿から私鉄（東武らしい）に乗って関東北部の見知らぬ町に下りてさまよっていた。帰ろうとして、とある駅に着いた。しかし、行先表示を見ても、新宿の名はおろか、知っている駅名がない。反対側のホームに行っても同じことだった。これでは、以前と同じことになってしまう、と思った。／「以前」というのは、（これは目覚めてから思い返したことだが）、似たような、私鉄で帰ろうとして、行先表示に見知った駅名がないという経験を、以前、夢でしていたのだが、この夢では、現実の経験ということになっていたのだった。……後略……」

この例では、夢の中で他の夢を現実の過去として想起できるという意味で、歴史的継続性があり、「現実」とのリアリティ度の差は程度問題に過ぎない。

@結論。事例1と事例2の特徴を備えた夢は、経験的に存在しうると思われる。そのような、夢の中で別人として生き、しかも、他の同様な過去の夢を現実として想起するような夢を、「転生」と解することには、原理的に矛盾はない。それゆえ夢世界の中に、現実世界の名に値する世界（たとえば私が別人へと転生した世界）を見出せるか否かは、経験的に探求すべき問題となる。

i 渡辺恒夫（印刷中）自我体験研究への現象学的アプローチ。質的心理学研究, 11.